

15. 仙台の七坂八小路

問 仙台の七坂八小路とは、どこですか。

答 このように、或る数を冠する事物の称呼を名数といいますが、七坂八小路の名数の定着したのは幕末頃といわれます。「奥陽名数」（杜撰子編、弘化2〔1845〕、「宮城県史」第32巻の内）に六坂八小路が見られます。このうち六坂に藤ヶ坂が加わって七坂となるのですが、それはいつの頃からか判然としません。

七坂とは、

1. 藤ヶ坂 片平丁から琵琶首へ下る坂で、藤の木があるのでこの名があるといわれます。「奥陽名数」では「藤ヶ崎」と称し坂に入れず七崎の中に入れてあります。
2. 大坂 大町一丁目頭と大橋との間の坂。⁽¹⁾
3. 扇坂 川内の宮城県スポーツセンター西側の道を登る坂。もと末広がりであったのでこの名があるといわれます。
4. 新坂 新坂通から澁町への坂。元禄8年〔1695〕に堤を切りくずして新しく作った坂道なのでこの名があるといわれます。
5. 元貞坂 東三番丁からレジャーセンターへ向う坂。信夫元貞という医者がここに住んでいたといっているのでこの名があるのだということです。
6. 茂市ヶ坂 元寺小路から、旧電車通の西裏の道を通り、花京院通りへ向う坂。茂市という座頭が住んでいたのでこう呼ばれたということです。
7. 石名坂 弓ノ町から円福寺へ下る坂。坂上の北側に、自然石の古い墓があり、それがこの坂道の名に因む石名という遊女の墓石だと伝えられ、碑面に承応3年〔1654〕と刻まれています。近年この墓石は円福寺山門内に移されました。

八小路とは、

1. 大名小路⁽²⁾ 片平丁のことで、片側に万石級の高級家臣〔御客大名と呼ばれた御一門クラス〕の大屋敷が置かれていたので、このように呼ばれました。
2. 寺小路 元寺小路のことで、政宗が城下町を創設した時の寺院地域だったが、寛永14年〔1637〕城下拡張の時、この寺小路にあった寺院の一部を八ツ塚（新寺小路）に移し侍丁となってから、寺小路は元寺小路と呼ばれることになったものです。
3. 狐小路 仙台高等裁判所の東側門前の町。昔は、しばしば狐の啼き声が聞えた淋しい所だったので、このように名づけられたということです。
4. 野干小路〔やかんこうじ〕 南町通と柳町通の間、東五・六番丁の間にあったが、明治20年東

北線開通の時仙台駅構内に入って潰れてしまいました。野干とは狐の異名で、狐小路と同じように、狐が出没するような淋しい所だったといえます。

5. 桜小路 道場小路から南へ七軒丁に達していた通りで、今はその大半が東北大学の敷地に入ってしまった。この小路の傍に元禄7年〔1694〕頃できた新馬場があって、古来馬場には付きものであった桜が植えてあったので、こう称したのだと伝えています。
6. 清水小路 かつて、五つ橋北角附近にこんこんと湧き出していた清水があって、これを大清水〔おうしず〕と称しましたが、仙台市がこの通りに下水道工事を行ってから、清水は止まってしまいました。この大清水と西側の屋敷屋敷に湧き出していた清水から流れ出る大量の水を町内堀で南へ土樋を貫き広瀬川に流す一方、荒町と土樋境の段差線沿いに東へ掘った源兵衛堀に流しました。清水小路という町名はこれから生れたものです。もとは、清水小路を「しずこうじ」、「すずこうじ」と呼んでいました。「しず」、「すず」とは「しみず」、「すみみず」の約です。河岸段丘の地層を伏流する豊富な水脈を造成工事で切断した状態となり、止度なく噴出する湧水に阻まれ、大量の水処理に手を焼き、第1次の城下町作りはこの線以東に越えることができなかったものようです。清水小路の名の初見は寛永9年〔1632〕で、延宝年間〔1673～1681〕の城下絵図によれば、清水小路には、中級家臣の屋敷が門を並べて割出されています。
7. 谷地小路 東七番丁のことで、昔はこの辺一帯が谷地であったのでこの名があります。
8. 連坊小路 五つ橋から木の下まで通っている長い町です。木の下にある陸奥国分寺は聖武天皇の時代〔724～749〕に建立されたもので、規模広大、その境内は西は五つ橋辺、南は南鍛冶町、北は国立病院辺を結ぶ範囲にわたっていました。国分寺に属した僧坊が、門前から五つ橋のあたりまで、軒を連ねていたところから、連坊小路の名が起ったといわれます。

〔「道場小路」を「谷地小路」に代える人もあります。道場小路は柳町の南、北目町の西裏にあったが、南半分は東北大学の敷地に入ってしまう、北半分の大半が、戦後狐小路から北目町に通る新道に斜めに切取られてしまい、僅かに小面積の三角地帯を残すだけになりました。剣客松林編也齋の道場があったのでこの名があります。〕

(3)
注(1) 「奥陽名数」に『鴉崎（荒巻文殊堂下）・茂ヶ崎（大年寺山東）・藤ヶ崎（茂庭周防屋敷向）
・鹿島崎（光明寺鹿島神社前）・駒ヶ崎（又松ヶ崎トモ云中島丁長沼氏宅地向〔現尚綱女学院所在地〕）
・玉田ヶ崎（又田歌ヶ崎万寿寺山向）・青葉崎（城後ノ地）。又曰。大崎
・藤ヶ崎・茂ヶ崎・鹿島崎・巴崎（切通し上り口）・月見崎・青葉崎』とある。

注(2) 小路とは細い道路を意味したものでなく、仙台では侍町即ち丁の横丁に限ってつけた呼称である。町人町の場合は文字通り横町と称した。「名数みやぎ郷土小事典」（菊地勝之助）に『小路は文字通り幅の狭い道のことで、封建時代の城下町の構想は多くの出入口を設け人目をくらし、身をかくすという方式で、小路もまた攻守両様の場合を考えた道であった。仙台下には多くの小路はあったが次の小路を八小路と呼んできた。』とあるのは誤

りである。「仙台の市街及び土木建築」（小倉強、「仙台市史」第3巻の内）に『……小路という町名がある。これは必ずしも細い道路という意味でないことは、江戸では上野広小路、仙台では大名小路（片平丁）清水小路などの幅広い道路の例でもわかる。一説では市街のはずれの路をいうとて大名小路、元寺小路（創設当時の町はずれ）の例をあげているが、表小路、狐小路、桜小路などは其例にあてはまらない。小路は侍丁に限って呼ばれ横町をいう呼称ではないかと思う。』とある。また片平丁は、もと横丁ともいい、大広丁とも呼ばれたことから、小路は道幅とは関係なく、侍丁の横丁であったと断定できる。

注(3) 剣道の達人、諱は永吉、左馬助と称し、扁也斎と号した。「伊達世臣家譜」巻9、召出部に『……永吉者信州浪士一為常州鹿島人……義山公時……賜禄三百石為召出家……』とある。14才頃既に剣名が知られ、武蔵赤山で願立流という一派を立てていたが、寛永20年〔1643〕伊達忠宗が3百石〔「仙台郷土史夜話」（三原良吉）に『知行千石……』と記す。〕をもって彼を招き、世子光宗〔19才で若死〕の師とした。その後ここに道場を開いたので道場小路の名が起ったという。代々の子孫がこの道場を守って幕末に及んだ。

資料 昔から今にいたる 宮城県に関する名数（矢島玄亮・鈴木嘉美）

奥陽名数（「宮城県史」第32巻の内）

仙台郷土史夜話（三原良吉）

連坊小路物語（田村 昭）

名数みやぎ郷土小事典（菊地勝之助）

16. 仙台七夕の由来

問 仙台七夕の由来を、くわしく知りたい。

答 仙台七夕とは、現在新暦の8月6日から8日にかけて、主に中心部の商店街で盛大に催される竹飾り行事を指しています。「祭り風土記」（宮尾しげを）に『星祭り〔?〕の形式が変化してしまい、七夕祭の信仰は全く見当らず、竹飾りの形式だけを伝えているのが仙台の七夕祭である。』と記してある通りです。伊達政宗が、低湿な原野をきり開いて、仙台の城下町を造成したのが17世紀の初頭でした。そこで行われてきた七夕祭は、全国どこにでもあったような素朴な、それでいて深い意味をもつ伝統的な民俗行事で、決して仙台特有のものではありませんでした。今日見られるようなスタイルの竹飾りも仙台で発生したものではなく、仙台北町創設から約100年後の元禄頃、江戸文化が生み出し江戸町々で行われていた江戸風のを移入して現代に至ったものであります。